

■久米邦武 歴史学者。「特命全権大使米欧回覧実記」で近代化に貢献、実証的研究で国粹主義の犠牲にも屈せず。

くめくにたけ

蚕社の獄・1839＝ 肥前国佐賀城下八幡小路で、佐賀藩士御側侍久米邦郷の三男に生まれる。次兄夭折のため、幼名泰次郎。

阿部正弘首座1845＝ 6歳：

孝明天皇・1846＝ 7歳：佐賀の{蒙養舎}に入り、論語の素読などし、

・ ・ ・ ・ ・ 1848＝ 9歳：

北斎没・ ・ ・ 1849＝10歳：父が大坂蔵方に転勤になったため、武富?南の{天燭社}にも通うことになり、典籍に親しむ。

国定忠治疎・1850＝11歳：この年、義祭同盟が結成される。

歴史書はほとんど読み尽くし、

ペリー来航・1853＝14歳：元服。算術を学び始め、大坂から戻った父とともに、長崎に赴いてロシア軍艦を見る。

開国開港・1854＝15歳：藩校{弘道館}に入り、大隈重信・副島種臣の知遇を得、大隈とは終生の交友を保つ。再び、長崎へ赴く。

この間、父は長崎開港などを経て、藩侯御側頭へ栄進して行く。

蕃書調所・1857＝18歳：

五ヶ国条約・1858＝19歳：義祭同盟に参加。

安政の大獄・1859＝20歳：{弘道館}を卒業、

桜田門外変・1860＝21歳：

遣欧使節・1861＝22歳：藩主鍋島直正(閑叟)と継嗣直大を交えた「唐鑑」研究に参加。

生麦事件・1862＝23歳：この前後、結婚。藩士の信書を薩摩藩主に届けるべく、江戸へ出発、紀行記録「跋渉備考」を執筆、

8月18日政変 1863＝24歳：江戸で古賀謹堂に師事後、昌平坂学問所の書生寮に入り、詩文掛に選ばれ、「大英国志」に接するが、

禁門の変・1864＝25歳：退寮し帰藩、藩校{弘道館}の補欠指南役を勤め、藩主と対談などするうち、前任者事故で、近習となる。

薩摩藩士密航1865＝26歳：佐賀来訪のフルベッキと面談。

薩長同盟・1866＝27歳：桂一郎が誕生(のち画家となる)。

大政奉還・1867＝28歳：長兄も早世していたため、家督を相続。丈一郎と改名。

明治維新・1868＝29歳：{弘道館}教諭になると、教科内容を改定。岩倉家子弟の九州遊学に協力。

戊辰戦争終・1869＝30歳：江藤新平の勧めで「藩治規約」を作成し公布。途中、生徒に意見され教諭辞任。藩大史兼神社局大弁から、

初の日刊新聞1870＝31歳：佐賀県権大属に転じ、

廃藩置県・1871＝32歳：藩士の死去で葬儀委員、続く父の死去後、大属。待望していた新藩主外遊計画は中止となったが、岩倉使

節団の米欧派遣に呼ばれ、権少外史となり、大使付属の枢密記録に任じられ、邦武と改名して、渡米。

学問のすすめ1872＝33歳：紀行編集掛を命じられ、各国を巡回して、後輩の薩摩藩士島山義成と協業で筆録に努め、

明治6年政変 1873＝34歳：帰国。大使事務局に出仕して、使節団の公式報告書の編集を始め、

佐賀の乱・1874＝35歳：帰郷し、江藤新平の乱に遭遇、家族を連れて上京後、広沢真臣暗殺事件にかかわって再び佐賀を往復、

初の民間工場1875＝36歳：大使事務局書類取調御用から権少史。京橋で半洋風の生活を始め、目黒に畑地を入手して農事もする。

西南戦争・1877＝38歳：前年に島山が死去したため、少書記官から太政官記録掛となる間、「ほとんど独力でまとめにかり、

大久保暗殺・1878＝39歳：\*膨大詳細かつ生き生きとした「特命全権大使米欧回覧実記」を刊行。五百円下賜され、上大崎に山荘建設。

琉球処分・1879＝40歳：修史館に移り、重野安釋のもとで編修に従事、歴史学者の道を歩み始める。

・ ・ ・ ・ ・ 1880＝41歳：明治天皇の近畿往復巡幸に供奉し、「東海東山巡幸日記」を編述。芝公園の能楽堂設置に参画し、

明治14年政変1881＝42歳：結成された能楽社社員。官撰正史「大日本編年史」の編纂開始とともに、執筆に当たりながら基礎を築き、

新体詩抄・1882＝43歳：正六位。

秩父事件・1884＝45歳：勲六等単光旭日章。

帝国大学始・1886＝47歳：修史館が廃止され内閣の臨時修史局になるも編修を続け、奏任官二等。

国民之友始・1887＝48歳：九州七県の史料探訪に出て、神電石を学界に紹介。

初の対等条約1888＝49歳：臨時修史局の帝国大学移管により文科大学教授となり、新設された国史科で重野・星野恒らと講座を担当

。近代実証史学の方法をもって史実を明快に確定すべく、「大日本史」や「日本外史」の大義名分論的・勸善懲

惡的史観を批判的・否定的に検証したため、世人から「抹殺派」史学の名をもって呼ばれるようになり、

帝国憲法発布1889＝50歳：史学会設立に尽力し、{史学会雑誌}創刊とともに、次々と問題提起の論文を執筆、

帝国議会始・1890＝51歳：奏任官一等。勲五等瑞宝章。論文多数。重野・星野とともに「(稿本)国史眼」全七冊刊行。

足尾鉾毒始・1891＝52歳：{史学会雑誌}に「太平記は史学に益なし」に続いて発表された「神道は祭天の古俗」は、田口鼎軒の挑発的紹

介の仕方もあるって「神道者流」の憤激を呼び、国粹主義的風潮の強まりつつあるなか、槍玉に挙げられ、

大本教・ ・ ・ 1892＝53歳：\*依願免官を余儀なくされた。

郡司千島探検1893＝54歳：

日清戦争始・1894＝55歳：史学会編纂委員を辞退するも、以後も講演・執筆は活発に続ける。立教学校教員となり、2年間史学担当。

日清戦争終・1895＝56歳：友人 大隈重信の引きで東京専門学校(現早稲田大学)の課外講師から、

白馬会・ ・ ・ 1896＝57歳：桂一郎が結婚するも、母、妻が相次ぎ死去。

子規句歌革新1898＝59歳：史学科が設置されて、

Bushidou・ ・ ・ 1899＝60歳：正規の講師となるも、大隈の配慮で役職につかずに、古文書学をその名とともに開拓、以後、日本古代史

に関する多数の著作を刊行。歴史地理研究会設立に尽力、以後貢献続ける。

教科書疑獄・1902＝63歳：「古文書学講義」。この年、東京専門学校が早稲田大学となる。以前から実施されていた早大独自の通信教

育「校外教育」に、「史料学講義録」が加えられ、以後、教壇より以上に力を注ぐ。

日比谷公園・1903＝64歳：この年設置された高等師範部講師に就任、

日露戦争終・1905＝66歳：「上宮太子実録」、

韓国反日暴動1907＝68歳：\*早大出版部「大日本時代史」の一環として記念碑的作品「日本古代史」「奈良朝史」「南北朝時代史」の三部作刊

行。ロングセラーとなって行く。「日本古代史と神道の関係」、

伊藤博文暗殺1909＝70歳：文学博士。高等師範部から大学部教員に移る。小田原旅行、

韓国併合・ ・ ・ 1910＝71歳：長府旅行。

大逆事件判決1911＝72歳：天津旅行。「(平安初期)裏面より見たる日本歴史」。\*早大に設けられた教授となるも、以後教壇に立たず、

明治天皇没・1912＝73歳：大隈夫妻とともに、山陰旅行。腎臓を冒され回復するも、湯河原で避寒療養、以後習慣となり、

大正政変・ ・ ・ 1913＝74歳：以後、地方史研究と清遊を兼ねて各地を旅行しながら、寄稿・出版、西欧文明の矛盾を説いたりする。

民本主義・ ・ ・ 1916＝77歳：国史講習会会長となり、月刊「国史講習録」を発刊。

本格政党内閣1918＝79歳：早大教授を退任するが、以後も講師として留まり、

べつ仁条約・1919＝80歳：冬の大半を清水の宿に滞在、第二の自邸のようになって行く。

大暴落・ ・ ・ 1920＝81歳：鍋島直正公伝「六巻と年表・索引・総目録」を刊行。

水平社結成・1922＝83歳：大隈重信死去とともに、完全に早稲田大学を退き、

なお、諸地方誌刊行に際して序文・題辞を寄稿しながら、

関東大震災・1923＝84歳：弘道館記念のための碑文を書く。

海軍軍縮条約1930＝91歳：桂一郎が前年伊豆三津に設けた別荘で越冬後、

満州事変・ ・ ・ 1931＝92歳：上大崎の自宅で、没した。

刀水書房「20世紀の歴史家たち2」、佐藤能丸「異彩の学者山脈」、ミネルヴァ書房「久米邦武」、「この人どんな人」、「没年日本史人物事典

」、日本の群像」、平凡社百科事典、